

Executive Summary

While global decarbonization continues, LNG has re-emerged as a practical transition fuel. This is not a setback but a reflection of real-world energy constraints. To move from reactive procurement to a proactive strategy, Japan can focus on three actions: Advance low-carbon LNG through methane reduction, CCUS integration, and certification. Strengthen co-investment with LNG-producing countries to stabilize supply and reduce volatility. Use LNG as a bridge toward hydrogen and ammonia by leveraging existing infrastructure. Japan's competitiveness will depend on how strategically LNG is used to support both energy security and decarbonization. The key is not “returning to LNG,” but using LNG intelligently to shape the next phase of Japan's energy future.

1. 脱炭素化の潮流と、エネルギー現場の現実

世界は脱炭素化を加速させていますが、同時に、エネルギー供給の安定性を確保するために LNG (液化天然ガス) が“移行期の基盤燃料”として再評価されています。日本のエネルギー企業も例外ではなく、再エネ・水素・アンモニアの普及が進む一方で、LNG の重要性は依然として高いままです。この状況は、「脱炭素に逆行している」のではなく、“移行期の現実を踏まえた柔軟なエネルギー運用”と捉えることができます。

2. LNG を“戦略的に活かす”ための 3 つの方向性

日本のエネルギー企業が、単なる調達依存から脱却し、能動的なエネルギー戦略へ進むための提案をまとめました。

① LNG の低炭素化(Decarbonized LNG)を主導する

世界ではすでに、メタン漏洩削減、CCUS との組み合わせ、低炭素 LNG の認証制度が進みつつあります。日本企業がここに積極的に関与すれば、“LNG を使いながら脱炭素を進める”国際的な枠組みをリードできる可能性があります。

② 供給国との共同投資・共同開発を強化する

LNG を買うだけではなく、液化設備への共同投資、長期的な技術協力、低炭素化プロジェクトの共同推進といった“共創型パートナーシップ”を築くことで、価格変動リスクを抑えつつ、日本のエネルギー安全保障を強化できます。

③ 次世代燃料(水素・アンモニア)への橋渡しとして位置づける

LNG は、水素・アンモニア社会への移行を支える“橋渡し燃料”です。LNG インフラの転用、混焼技術の高度化、既存設備の低炭素化、これらを組み合わせることで、LNG → 水素・アンモニアへのスムーズな移行が可能になります。

3. 2026 年、日本のエネルギー企業に求められる姿勢

重要なのは、「LNG に戻った」という後ろ向きな評価ではなく、“LNG をどう戦略的に使いながら、次の技術へ移行するか”という前向きな視点です。世界の潮流を踏まえつつ、日本企業が主導権を持って動くことで、エネルギー安全保障と脱炭素の両立が可能になります。

4. 結び: 移行期の日本に必要なのは“戦略的柔軟性”

脱炭素化は長期戦です。その中で、LNG は依然として重要な役割を果たします。しかしながら、“買うだけの LNG”から、“戦略的に活かす LNG”へ。この転換こそが、2026 年の日本に求められるエネルギー戦略だと考えます。総じて、2026 年は関西経済にとって「構造転換の年」であると言えます。対立と協調の狭間で揺れながらも、新しい均衡点を探る一年となるでしょう。日本企業にとっては、“どこに投資するか”よりも、“どの構造を選び、どの語りで未来を描くか”が問われるはずです。2026 年は、構造を見抜き、語りを整え、選択を創造する年であるからです。